関西

自慢の識別 お金から顔へ

グローリー、医療・介護にピント

キャッシュレスの逆風

患者確認や見守りに一役

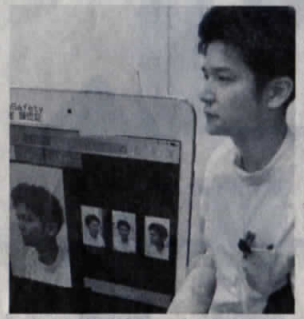
貨幣処理機大手のグローリーは貨幣識別を応用した顔認証技術で、医療・介護のニッチ分野を開拓する。手術前に患者の本人確認をする実証実験を始めたほか、認知症患者らの見守りシステムも開発する。新規事業の中核と位置付ける顔認証はNECなど大手も手掛ける。競合が少ない領域でいち早く顧客をつかみ、キャッシュレス化の波に対応する。

2019年夏から三栄会ツカザキ病院（兵庫県姫路市）と連携し、顔認証を使った眼科手術前の患者の本人確認を始めた。手術の直前の患者をタブレット端末で撮影。人工知能（AI）が事前に登録した写真と比べ同じ人物かを判断する。

白内障手術では目の濁った水晶体を人工水晶体と交換する。左右どちらの目にどの度数のレンズを入れるかなど確認項目が多く「安全を確保しながら受け入れ患者数を増やすには人間による対策だけでは不十分」（田淵仁志主任部長）。人間の判断を介さずに本人確認の精度を一層高めるためにAI認証を使う。

活用したのがグローリーの顔認証技術だ。顔周辺の100カ所の特徴を捉え、人間の平均的な顔との差を検知する。顔全体の特徴を捉えるため顔の一部が隠れたり、年をとって変わったりしても本人確認できるという。

大阪市立大学医学部発のスタートアップ企業エコナビスタ（東京・千代田）と連携し高齢者や認知症患者を見守るシステムも開発する。室内センサーで入居者の姿勢から転倒や急病を検知する。グローリーの亀山博史・上席執行役員は「認知症患者の増加や遠隔診療の広がりで、医療・介護現場での顔認証需要は増える」とみる。



顔認証を使った本人確認実験を行う病院職員

同社は通貨処理機で国内シェアトップで釣り銭機や出入金機などを手掛ける。連結売上高の9割近くが国内外の金融機関や小売店向けで、キャッシュレス化への危機感は強い。19年4～12月期の連結決算では19年3月期までの大口需要の反動もあり、金融機関向け事業の営業利益は25億円と前年同期比48%減だった。

空港や大型商業施設向けの顔認証事業ではNECやパナソニックなど大手も強い。グローリーは顔認証などの個体認証事業を23年3月期までに黒字化する方針。「医療現場での本人確認はニッチな分野だが潜在的な市場は大きい」（亀山上席執行役員）とみて診療費支払機の顧客網も生かし、先行して事業基盤を拡大する。（佐藤遼太郎）